日刊工業新聞

年月日	20	11	25	ページ	31	NO.	

北九州のIoTニュー“フェイス”⑤

工程を最適化 納期も短縮

イワキ工業　スマホ・2次元コード活用

九州を代表する産業用特殊ネジメーカーのイワキ工業（北九州市小倉南区、松本俊満社長、093・471・1221）は、事業変革のまっただ中にある。後継者難のため2017年5月に隣接する戸畑製作所（北九州市小倉南区）の傘下に入り、同社から松本社長を受け入れて勘や経験が横行していた営業や製造現場へのIoT（モノのインターネット）導入を進める。

経営を託された松本社長が最初に感じたことが「技術はあるが、一人ひとりの仕事の取り組みが見えない」ことだった。見積もりに対して基準があいまいで、経験やその時の景況感で受注価格が上下しており、類似製品でも人や時期によって金額にバラつきがあった。また生産管理システムを導入していたが表計算ソフトへの再入力が必要だったり、日報が手書きなど、無駄なアナログ作業が目立っていた。「全員が楽に仕事をするにはどうすべきか」とたどり着いたのが、工程管理のデジタル化だった。

北九州産業学術推進機構（FAIS）と進めた共同研究は、作業者に専用のスマートフォンを配備し、2次元コードを読み込ませて鍛圧や熱処理、ネジ転造といった各製造工程の工数把握や作業時間を見える化した。また作業時間を標準化すると同時に、装置の稼働時間を把握することで工程の最適化にも取り組んだ。2次元コードは作業開始時に一度読み取ればデータの収集・管理ができるようになり、データ蓄積で原価率を明確にし、評価や納期短縮につなげていく。

材料の切断や鍛圧・鍛造など一連の工程をデジタル化する

現在は試用期間として5人程度の管理者で検証しており、21年初頭にも製造現場の約20人にスマートフォンを配備する。松本社長は「生産性が上がれば納期短縮や受注拡大、有給取得増加も見込め、顧客、従業員双方にメリットがある」と期待、IoT導入で営業利益率2％向上を目指すとしている。FAISは簡素なシステムを使って効果を実証できれば、市内企業にも技術を開示する計画だ。

（水曜日に掲載）

無断転載・複写禁止㈱日刊工業新聞社